

コーヒーの意味と価値の変容  
——エチオピア南西部の事例——

石原 美奈子

キーワード

エチオピア、オロモ、イスラーム、コーヒー、価値

はじめに

いまやコーヒーは、世界中で嗜好される飲料物となり、コーヒーを飲む文化の歴史に関する書物は数多ある (Hattox 1985; 臼井 1992)。それによると、コーヒー豆の発祥地はアフリカ大陸であり、コーヒーを飲む文化はアラブ (イエメン) で発達した。ただし、コーヒーの世界市場に占める割合の最も大きいアラビカ種の発祥地はエチオピアであるとされる (Coste 1992)。本論文は、エチオピアのなかでもコーヒー発祥の地とされるエチオピア南西部において、19 世紀以降の政治経済的变化にともない、コーヒーの価値と意味がどのように変化してきたのかについてとりあげる。

現在エチオピアにおいてコーヒーは、主要な輸出産品となっているが、国内消費量が多いことでも知られている<sup>1</sup>。それはエチオピア国内でコーヒーを飲むことがまるで国民文化のように普及していることと無関係ではない。エチオピアはどこに行ってもコーヒーで接待され、隣近所同士のつきあいの場では必ずコーヒーが振る舞われる。エチオピア政府は「コーヒー発祥の地」を観光の PR として用いており、観光客が訪れるホテルやレストランでは必ずといっていいほど「コーヒー・セレモニー」<sup>2</sup>が行われる。だが現在のようにコーヒーを飲む文化が国民的拡がりをもたらしたのは 20 世紀に入ってからである (Rita Pankhurst 1997)。

エチオピア発祥のコーヒーは、ムスリム・アラブ文化圏に伝わり、そこでコーヒー飲用文化 (焙煎したコーヒー豆を煮立てて飲む文化) が発達し、ムスリム・アラブがもつ交易ネットワークによってイスラームとともにエチオピアに「逆輸入」された。19 世紀前半まではエチオピア東部のハラル、北東部のイファトやウオロ、マッサワ、そして南西部のジンマ・カファなどムスリムが多数派を占める地域においてコーヒー飲用文化が取り入れられた。すなわち 19 世紀半ばまではエチオピアでコーヒー飲用文化はおおむねムスリム社会

---

<sup>1</sup> Petit (2007) によると、エチオピアはコーヒー生産国のなかで最も国内消費量が多く、全生産量のおよそ 40% が国内消費にあてられている。

<sup>2</sup> 「コーヒー・セレモニー (*yābunna sar'āt*)」は、コーヒー豆を炭火で煎ることから始まり、コーヒー・ポット (*jābāna*) で粉末にしたコーヒーを煮立て、客に振る舞うまでの一連の所作をさす。この一連の所作は、視覚・嗅覚・聴覚・味覚に働きかける洗練された動作を要件としてなりたつ芸術的行為である。

に限定されており、キリスト教徒の間では「ムスリムあるいはガッラ<sup>3</sup>のもの」として忌み嫌われていた<sup>4</sup>。ところが、19世紀後半になると北部アビシニア高原のキリスト教徒社会にもそれが少しずつ広まった。とくに1880年以降、コーヒー好きで知られたメネリク2世の治世下(位1889-1913)でキリスト教徒社会の間にコーヒー飲用文化は広まった。同時代の司教アブナ・マテウオスが、コーヒーをムスリム専用の飲み物ではないと公言したことも、キリスト教徒の間にコーヒー飲用文化が普及するのを後押しした。1930年代になると、キリスト教徒の一般民衆の間にもコーヒー飲用文化が根づき始める(Richard Pankhurst 1968: 198)。

もっともエチオピアでは、ムスリムがコーヒー飲用文化をもちこむ以前は、民族・地域によってさまざまな消費の仕方が慣習として根付いており、その一部は現在でも続けられている。たとえば、エチオピアの人口の4割を占めるオロモの間では、地域的偏差はあるものの、「ブナ・カラ (*bunaa qalaa*) (コーヒーの供犠)」が広く行われている。これは殻付きのコーヒー豆 (*janfal*) をバターで煎ったもの、あるいは煎る行為自体をさし、多義的な象徴媒体として儀礼のなかで用いられる。またコーヒー豆ではなく、コーヒー豆の殻やコーヒーの葉を香料とともに煮立てて飲用する地域もある(福井 1981)。

コーヒー同様、やはり商品作物でありながら、多義的な象徴媒体として利用される植物にカート (*Catha edulis Forsk.*)<sup>5</sup>がある。カートはエチオピアのみならずアラビア半島南部からソマリア・ケニアにかけての広い地域において、主としてムスリムの間で嗜好品として消費される植物である。飲酒が禁止されているムスリム社会において、その葉を噛むことによって軽い覚せい作用をもつカートは、宗教儀礼や社交の場には欠かせないものとなっている(Hussein 2010)。エチオピアにおいて、カートは歴史的にムスリムのもの、あるいは「イスラーム的」であると理解されており、キリスト教徒、とくに若者を中心にカートが流行しはじめたのは20世紀末になってからである。カートは、弱いながらも覚醒作用があるということで、若者とくに学生や運転手の間で流行したのである。だがいまだに敬虔なキリスト教徒の間では、カートを社会悪としてとらえる風潮はある。このようにカートは、それを利用する者のある種の宗教的・社会的立場を表現する媒体となっている。カートの場合、ムスリムの宗教儀礼に欠かせないという点でコーヒーに似ているが、ハシシなどの麻薬性植物との近似性から社会悪に類別され、国民的文化になりそこねた。

コーヒーは、エチオピア南西部に起源地があるとされ、南西部にひろがる自然林にはいまだに野生種がのこっている(Tezera 2008)。コーヒーの「発見」については「やぎ飼い少年カルディの伝説」が知られているが、その伝説の出所の曖昧さもあり、この伝説によってコーヒーが「発見」された地、すなわち「発祥地」がわかるものではないとされている。そうした曖昧さゆえに、コーヒーの「発祥地」の所在について議論の余地がうまれ、

<sup>3</sup> ガッラ (*Galla*) とは、アビシニア高原にすむキリスト教徒がオロモを侮蔑を込めてよぶ他称である。

<sup>4</sup> 同じムスリムでもソマリ人の中には、コーヒーを飲む文化は浸透しなかった(Richard Pankhurst 1968:198)。

<sup>5</sup> カート (*Catha edulis*) は、アラビア語圏での呼称であり、エチオピアではチャット (*ch'at*)、ジマー (*jimaa*)、ゴファ (*gofa*)、ガルバボ (*garbabo*)、などと呼ばれている(Wolde Michael 1987; Cecchi 1885)。

さらには「発祥地」を文化資源として活用する動きのなかでコーヒーは政治化されてきている。

このようにコーヒーは世界的に市場をもつ商品であるだけでなく、エチオピア南西部においては、支配者が権力の基盤とする財であり、一般民衆の間では水平方向の社会関係を取り結ぶ媒体であり、人間が神霊界と垂直方向の交信に用いる媒体でもある。言い替えるならば、コーヒーはエチオピア南西部の人々をとりまく 19 世紀以降のめまぐるしい政治経済情勢の変化の中核にあり、その変化を顕著に表徴してきたモノである。コーヒーに付与された価値や意義の変容をみることで、エチオピア南西部の人々がいかに国家・イスラーム世界ひいてはグローバルな世界に包摂され、影響を受けてきたかが明らかにされる。その意味でエチオピア南西部においてコーヒーは、ターナー流に表現するならば政治・経済・社会・宗教などさまざまな意味や価値とその変化を表現する「支配的象徴」である。したがって本稿で展開する議論は『物質文化ハンドブック』で取り上げられる物質文化への視角の分類からすると、「8 モノと価値体系・宇宙観・信仰と感情、広くは個人・社会的アイデンティティとの関係」(Tilley et al. 2006: 4)に含めることができよう。

本稿は、エチオピア南西部においてコーヒー生産地として知られるジンマ地方にすむムスリム・オロモの人々の間で、コーヒーがどのような意味と価値を付与され、それがどのように変化してきたのか、について考察する<sup>6</sup>。まずはじめにコーヒーの価値をとらえる視覚を整理した後に、本稿が執筆対象とするエチオピア南西部のジンマ県の地理・歴史概要を記す。つぎに、コーヒーの政治経済的価値が歴史のなかでどのように変化してきたかをふりかえった後に、その文化的・象徴的価値に立脚した儀礼的利用を描き出す。そして最後に、21 世紀に入ってからエチオピア南西部でわき起こった「コーヒー発祥地」に関する議論と、コーヒーを文化資源として利用する動きについてふれる。

## 1. コーヒーの価値

エチオピアにおいてコーヒーは、単に経済的価値をもつ商品作物あるいは個人の嗜好品として消費されるものではない。コーヒーは、飲食物であるとともに政治権力の維持拡大のために用いられる道具であり、社会関係を取り結ぶ契機を与えるものであり、神霊と交信する手段でもある。コーヒーの使い方が、歴史のなかで変化してきたのと同様に、コーヒーに付与される価値もまた変化してきた。コーヒーに付与される意味と価値の変化をみるには、その「形状・用法・歴史的軌跡」に注目する必要がある (Appadurai 1986: 5)。

私たちが日常的になじみのあるコーヒーの用法は、その実のなかにある種を焙煎し粉碎したものを煮立てて、あるいは湯でこして飲むやり方である。だが、そうしたコーヒーの使い方は、植物としてコーヒーがもっている性質の一つを利用することにすぎない。コーヒーの木は、通常は単独で生えているわけではなく、複数のコーヒーの木が森のなかに自生しているか、もしくは農園のなかに植栽されている。森や農園は一定の土地を占有しており、土地は特定の所有者がいるものである。したがって、コーヒーについて語る場合、

---

<sup>6</sup> 本稿で用いられている資料やデータは、1992～2012 年にかけて筆者がエチオピア南西部で断続的に実施してきた文部科学省科学研究費補助金による調査、および 2010 年度南山大学パッへ研究奨励金 (I-A) による調査の成果である。

コーヒーの木が生えている土地の所有もしくは所有関係がかかわってくる。所有関係は、政治体系と密接な関連があり、政治体系は歴史的に変化するの、所有関係もまた変化する。土地の所有は、人と人との間の社会的取引（結婚・贈与・売買・貸借など）を含意し、コーヒーの木のある土地は他の種類の土地とは異なる価値をもつ。すなわちコーヒー生産地において、コーヒーは換金作物であるだけでなく、土地所有の形態、もしくはそれと関連の深い政治体系の変化や社会的取引の形態の多様性を映し出す媒体でもある。

コーヒーの木のある土地（コーヒー農園）の価値は、いうまでもなくコーヒーの価値に依存している。コーヒーのもつ「価値」について、グレーバーの価値論に基づいて、①社会学的価値、②経済的価値、③構造的・象徴的価値の3つの観点から論じることができる<sup>7</sup>。ただしコーヒーがもつこれら3つの「価値」は、必ずしも切り離して論じることができるものではなく、相互に関連している。コーヒーは、一本の木にたくさんの実をつけることから多産性を連想させる。そのためエチオピア南西部ジンマ県のオロモ社会では、男女が結婚するとき、夫が妻にコーヒー農園を贈ることがある。この慣習はコーヒーが、オロモの社会的価値（多産・豊饒）を象徴することにもとづいている。同時に、結婚の際にコーヒー農園の代わりに贈与する可能性のあるものが現金か雌牛であることを考えると、コーヒーの構造的な価値につながる。コーヒー・現金・雌牛がもつ共通性あるいは共約可能性（commensurability）は、いずれも利益を生む潜在的価値をもつ、すなわち経済的価値があるという点に由来する（cf. Weiss 2003）。

すなわちコーヒーのもつ複数の価値は相互に関連している。コーヒーは、経済的価値をもつから社会学的にも価値をもつ。またコーヒーの構造的価値はその経済的価値と関連している。だが、コーヒーのもつ複数の価値は、その一つでも崩れると相互関連性が成り立たなくなる。そこにコーヒーのもつ価値の歴史変化をみる意義がある。

カッサネリ（1986）は、カートの「商品が占有する領域（commodity ecumene）」、すなわち商品の生成・流通・消費に関わりをもつ領域（この場合、生産者・販売者・消費者）が超文化的に関係のネットワークが拡大したことについて、基盤インフラの発展や都市化といった外部的要因をあげている（Appadurai 1986: 27）。

エチオピア南西部のジンマ県のオロモ社会において、コーヒーの経済的価値に影響を与えてきた外部的要因として、エチオピア国内の政治体制の変化、国際市場の動向に加え、イスラーム改革主義の拡がりや民族政治などがあげられる。こうした外部的要因がコーヒーという「商品が占有する領域」の拡大、ひいてはコーヒーの価値の変容にどのように影響を与えてきたのか、以下に検討する。

## 2. ジンマ県の概観

<sup>7</sup> グレーバー（2001）は、「価値」に関する人類学的考察が、①社会学的見地（人間生活において究極的に善で、適切で、望ましいとされる事柄）、②経済的見地（そのものが欲求の対象となっている程度）、③言語学的見地（意味のある違い）の3つの観点から行われてきたと論じている（Graeber 2001: 1-2）。

## 2-1. 地理的概観と農業

ジンマ県 (Jimma Zone) は、現 EPRDF 政権<sup>8</sup>下で進められたいわゆる「民族連邦制」のもとで、国内最大面積を占めるオロミア州のなかでも南西部に位置づけられる。

ジンマ県は現在 17 郡 (*wäräda*) からなり、標高や地形に応じて穀物 (テフ・小麦・大麦・トウモロコシ・ソルガム・シコクビエ・米) やエンセーテ (*Enset ventricosum*)、バナナ・パイナップル・パパイヤ・マンゴー・オレンジ・アボカド・リンゴなどの果実類、ジャガイモ・サツマイモ・タロイモなどのイモ類、タマネギ・トマト・ニンジン・トウガラシなどの野菜類、ヒヨコ豆・レンズ豆などの豆類、コーヒーやカートなどの嗜好品植物を栽培する、豊かな農業地帯となっている。ジンマ地方の人口 2,486,155 人のうち、農村人口が 2,348,487 人 (94.5%) となっており、農業従事者が大半を占める (2007 年統計による)。

ジンマ県の住民の約 60-65% が直接・間接にコーヒーに関連した職業に従事しているとされている。ジンマ県のなかでも、コーヒー生産量が高いのは 10 郡とされ、本論文でとりあげるゴンマ郡やリンム・コサ郡、リンム・サカ郡もそこに含まれる。県内のコーヒー栽培面積は、個人農家所有が 131,084 ヘクタール、国営コーヒー農園が 7,956 ヘクタール、そして投資家が所有する農園が 11,246 ヘクタール、計 150,286 ヘクタールとなっている。

ジンマ県が 1 年に生産するコーヒーの量は不明であるが、およそ 4 万トンを中心市場に供給している<sup>9</sup>。エチオピア全土で生産されるコーヒーの量がおおよそ 14~18 万トンなので (Petty et al. 2004: 6)、その 3 分の 1 程度に相当する。

## 2-2. 人口構成と歴史

また、民族・宗教別の人口構成をみると、ジンマ県の大半がムスリム・オロモからなる<sup>10</sup>。ジンマ県に含まれる地域は、19 世紀初頭に建てられた「ギベ 5 王国 (*Gibe Shanana*)」<sup>11</sup>の地域とほぼ一致する。ギベ 5 王国は、16 世紀以降、エチオピア南東部から四方に移動拡散したオロモの一派マチャの一部が土着の異民族を吸収併合、オロモ化した人々が 19 世紀初頭に建設した (Mohammed 1990)。隣接地域に定着したオロモと異なるのは、王国を形成したことと、王をはじめ住民がイスラームを受容したことがあげられる。ギベ 5 王国は、南方のカファ王国方面から奴隷・象牙・動物の毛皮・香料・麝香などを購入したムスリム商人が北部の紅海への搬出港に輸送する際に用いる長距離交易路が通過する地点に形成された。5 王国は、それぞれ世襲の王のもとに統治され、王の庇護下に置かれたムスリム商人と、商人が往来する長距離交易路を辿って北部からやってきたムスリム宗教指導者によって王族のみならず民衆の間にもイスラームが広まった (Mohammed 1990; 石原 2009)。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、エチオピア中央部にあるショワ地方の王メネリク 2

<sup>8</sup> EPRDF は、エチオピア人民革命民主戦線の略で、1991 年に政権を奪取した。

<sup>9</sup> 2010 年 8 月、ジンマ県農業局提供の資料による。ただし、この 4 万トンには生産者の自家消費分は含まれないため、実質的な生産量はこれを上回る。

<sup>10</sup> ジンマ地方の人口の内、ムスリム人口は 2,129,321 人 (85.6%)、オロモ人口は 2,177,836 人 (87.6%) となっている (2007 年統計による)。

<sup>11</sup> ギベ川の支流沿いに建国された、ムスリム・オロモの諸王国であり、リンム、グマ、ゴンマ、ジンマ、ゲラの 5 王国をさす。

世が皇帝になり、南部一帯の征服に乗り出すと、ギベ5王国もその対象となった。だが、5王国の内、4王国はキリスト教の皇帝が統べる帝国に屈服することを拒み、王 (*mooti*) は領主頭 (*wanna balabbat*) に格下げされ、キリスト教徒アムハラの行政官が派遣された。一方、5王国のうちジンマ王国は、はやくから帝国との軍事力の違いに気づき、多額の税の貢納と引き換えに自治を約束せしめた。そのためジンマ王国の領内には、最後の王、アッバ・ジファール2世の死 (1932年) とともに自治権を剥奪されるまでアムハラ貴族が移住してくることも (エチオピア正教会の) 教会が建設されることもなかった。だがアッバ・ジファール2世の死後、ジンマはカファ州 (*t'äqalay gəzat*) に組み込まれ、ジンマ市はその州都としてアムハラ行政官が任命された。

それとは対照的に、ジンマ王国以外の4王国のうち、とりわけコーヒー栽培に適しており、交通の便もよかったゴンマ王国、リンム王国の土地にはアムハラ人の貴族が住み着き、イタリア統治期 (1936-41) 以降、コーヒー大農園を開設して巨万の富を得た (松村 2008; Guluma 2002)。

だが、1974年にエチオピアで革命がおき、デルグ (軍部・警察からなる合同委員会) が政権を掌握する体制が成立し、社会主義体制をとるとなると、大土地所有者はその土地を国有化と称して没収され、オロモの小作人に分配された。アムハラが経営していた大規模なコーヒー農園は、国有化されて国営コーヒー農園とされた。こうしてジンマ県 (当時はリンム県 *awraja*) に成立したのが「ゴンマ1」「ゴンマ2」「ストゥ」などの5つの国営コーヒー農園である。

デルグ政権下で農村の社会生活は一変した。それまで地方の農村部は、国家の干渉から比較的「自由」であった。だがその「自由」の反面、電気や水道など「近代的」生活条件が未整備であったり、学校教育も普及していなかったりしていた。デルグ政権のもとで国民の9割を占める農民に対する支配が不可欠であるとして、全国的に「集村化計画」や「再定住計画」などを通して農村を再編成し、農民組合・女性組合・青年組合などの組合組織を行政組織の末端に組み入れることで農民の掌握につとめた。農村部の住民は、デルグ政権期を回顧するとき、「毎日のように集会に召集された」とこぼす。農村部では、男性は午前中に農作業を終えて、午後は三々五々隣人・友人宅に集まっては、祈祷集会を開き、コーヒーを飲んだり、カートを噛んだりしていたものであったが、そうした時間をとることもできなくなっただけでなく、そうした集会は禁止された。またそうした祈祷集会の中心的役割をになっていた宗教指導者や霊媒師のなかには投獄されるものまででた。当時の宗教活動の低迷状態について、人々は「宗教心 (*niya*)」が減ったと表現している。

1991年にデルグ政権が崩壊し、現EPRDF政権が成立した後、宗教全般に対する規制が緩和され、集会・表現・結社の自由が保障されたことを受けて、少しずつ宗教活動が復活し始めたが、デルグ政権以前にはジンマ県にほとんどみられなかった潮流が出現した。それは人々が「ワハビーヤ」と呼ぶイスラーム改革主義者たちである。「ワハビーヤ」は、イスラーム神秘主義 (スーフィズム) や聖者崇拜などの伝統的なムスリムの慣習・慣行を「非イスラーム的」として非難し、彼らが「イスラーム的」と解する行動様式をとることを奨励した。「イスラーム的」とされる行動様式には、聖者廟参詣や祈祷集会に参加しないことや参加する人々を非難することのみならず、身体にまつわることがら (男性は顎鬚を伸ばすこと、女性は顔だけが露出するジルバークや黒ずくめで顔までかくすブルガを着用する

こと) や「イスラーム的」ではない儀礼を放棄すること、などが含まれる。1日5回行われる礼拝も、なるべくモスクで行うことを奨励し、礼拝は個別に、しかも「スンナ」<sup>12</sup>を取り入れないことを奨励するため、「ワハビーヤ」の立場をとる人々とそうでない人々の間で礼拝の仕方をめぐるモスク内での争いも生じており、都市部では「ワハビーヤ」専用のモスクを新設する動きもみられた。

### 3. コーヒーと政治権力

コーヒーは、王国時代・帝政時代・デルグ時代・現 EPRDF 政権期を通じて、富の源泉として政治権力と結びついてきた。

#### 3-1. 王の財

19世紀ギベ王国は、南方のカファ王国とともにコーヒー発祥地として知られ、コーヒーの木が自生していた。19世紀、ギベ王国時代、コーヒーは今日のリンム・サカおよびリンム・コサ郡(旧リンム王国)、ゲラ郡(旧ゲラ王国)、ゴンマ郡(旧ゴンマ王国)に広く自生していたが、森の産物全般がそうであったように、コーヒーもまた王の所有物とされた。1840-43年にエチオピアを旅したピークは、19世紀半ばリンム王国(エンナリア)におけるコーヒー林について次のように報告を受けたと述べている。

「エンナリアは、広大なコーヒーの森があることで知られている。その森は王国の一大商業中心地サッカ(Sakka)<sup>13</sup>の向こうに隣接するGibbiの谷が中心である。この森には、直径2-3フィート(0.6~0.9m)もある木<sup>14</sup>が生えているとされる。これは王の所有であり、王の奴隷が見張りをつとめる。」(Beke 1843: 257)

コーヒーの森は王の奴隷によって見張られるだけではない。1840年ころこの地を訪れたダバディによると、王のコーヒーの森で一粒でもコーヒーの実を盗んだところを見張りに発見された者は、もしその者がムスリムでなかったら「奴隷のように売られる」<sup>15</sup>。

王は自らが所有する森のコーヒーを商人に売りつける。ピークはコーヒーの販売の仕方について次のように述べている。

「コーヒーの収穫は12月に始まり、王の女奴隷たちがサッカから収穫作業にでかける。朝でかけ、夕方荷を担いで戻ってくる。サッカでのその値段はとても低い。私はアモレ<sup>16</sup>1本で買えるコーヒーの量は、7~15ポンド(約3,178~6,810g)と言われた。だがどうやら普

---

<sup>12</sup> 義務としての礼拝の前後に組み込む自発的な礼拝をさす。たとえば朝の礼拝は2ラクアから構成されるが、このほかに2ラクア自主的に行うこと、これを「スンナ」とよぶ。

<sup>13</sup> サッカは、リンム王国時代王宮が置かれた。

<sup>14</sup> おそらくここに出てくる「直径2-3フィートもある木」とは、コーヒーそのものではなく、コーヒーの間に生えている庇陰樹であると思われる。

<sup>15</sup> Antoine d'Abbadie 著 *Journal (Nouvelle Acquisition Francaise, 21300)*, f. 572.

<sup>16</sup> アモレとは、棒状になった塩塊であり、19世紀まで貨幣として用いられた。

通はロバかラバ単位で売られているようだ。ヤウシュのあるムスリム大商人に仕えるキリスト教徒の使用人が私に話してくれたところによると、彼は主人から2ドルもらって、ロバ4頭分のコーヒー（ロバ込み）をサッカから購入してきたという。その後、彼はそのロバを連れてバソ（Baso）に戻り、それを使って自ら商売を始めた。だが別方面から聞いたところによると、コーヒーは王からラバ単位で購入するものであるそうだ。コーヒーはラバが運べるだけ担いで1頭あたり1ドルであるという。・・・（中略）・・・それだけが規準なので、市場向けになるべく体格の大きく、力の強いラバを訓練していることは驚くにあたらない。」（Beke 1843: 258）

だが同じ時期にエンナリアを実際に訪れているダバディはエンナリアのコーヒーについて次のように述べている。

「アビシニアの商人とアフチャラ（オロモ商人）は、エンナリアからバソにおよそ1000積み(charges)、およそ4万キロ相当のコーヒーを輸送する。エンナリアの商人たちはそこで8万キロ（のコーヒー）をさらに買い足して、そのほぼすべてを Ware Haymano<sup>17</sup>と近隣の部族に売り、そこで消費される。『国から1年で16万キロ（4000積み）も出ていくのではないか』と私がタムルに言うと『信じられない』という答えがかえってきた。コーヒーは大樹の陰で自生し、すべて王の所有である。」<sup>18</sup>

これによると、40キロ単位で売られていたということになる。

「またここで指摘しておく必要があるのは、エンナリアから出荷されるもの以外では、商業目的に栽培されているコーヒーはほとんどないことである。ジンマとカファには少量しかなく、同様のことがゴジェブ川溪谷についてもいえる。」（Beke 1843: 257-258）

このように、はやくも19世紀半ばにおいてエンナリア（リンム）では、王が所有する森にコーヒーが商品作物として栽培されていた。だが、ジンマとカファにおいては商品作物として栽培されていなかったようだ。ただカファでは、コーヒーはカートやコロリマ（*Aframomum angustifolium*）とともに森に自生していた（Beke 1843: 263）。

ビークが「ゴジェブ溪谷」と言及している地域に旧ゲラ王国が含まれる。このゲラ王国では、コーヒーは栽培されておらず、野生のコーヒーしかなく、そのコーヒーもやはり（旧ゲラ王国の）王の所有であり、ここでは王国の臣民がコーヒー摘み作業にかりだされ、摘み取ったものは王にさしだすよう強要された。一般の住民がコーヒーを消費することは禁じられており、きまりにさからってコーヒーを飲んでいるところを発見されると「奴隷として売り飛ばされた」（McCann 1995: 160）。

<sup>17</sup> エチオピア北東部のウォロ地方にある Warra Himano のことと思われる。ウォロ地方は、ムスリムの古都ハラルとともにイスラーム学の中心地として知られ、カートやコーヒーの消費量も多かった。

<sup>18</sup> Antoine d' Abbadie 著 Journal (Nouvelle Acquisition Francaise, 21300), f. 569.



### 3-2. 北部出身のキリスト教徒貴族のコーヒー農園

19世紀末、メネリク2世が南部一帯を征服・併合するなかで、ギベ5王国もエチオピア帝国の支配下に置かれた。もっともギベ5王国のうち、交易によって政治力をつけたジンマ王国のみ莫大な税の支払いと引き換えに自治を保持した。残りの4王国は、帝国軍と激しい戦闘を交え、多くの犠牲を払うことになった。ムスリム・オロモの王の失脚とキリスト教徒のアムハラ行政官の派遣により、北部出身のキリスト教徒たちの入植が増えた。その多くが「野生」であり所有者がいないとみなされたコーヒーの森を占領した。それは従前王の所領とされており、王の失脚とともに放置されていたコーヒーの森であった。その森をキリスト教徒のアムハラが競い合って囲い込み、私領とし、コーヒーの農園経営に乗り出したのである。農民も、コーヒー栽培をやめて生存のため、もしくは領主に支払う租税となるために穀物をおもに栽培した (Guluma 2002:58)。ジンマの最後の王アッバ・ジファール2世 (位 1873-1930) も、皇帝メネリク2世に対して自治と引き換えに課せられていた税をコーヒーで納めるように要求されたことがある。たとえば1893年、メネリク2世は、外国人商人たちから武器を購入する際に、コーヒーで支払うように求められたことから、ジンマに50トンのコーヒーを納めるよう要求した (Guluma 2002:58)。

1920年代になると、アムハラ行政官は、コーヒー農園を開設・運営した。この間、エチオピア南西部から出荷されるコーヒーは「アビシニアン・コーヒー」として輸出され、その量は1921年の288トンから1935年には9,408トンにまで跳ね上がった。コーヒーの輸出量の増加により、中央政府はますますエチオピア南西部のジンマ地方を直接統治する必要性を感じ始め、アッバ・ジファール2世の逝去 (1932年) とともにキリスト教徒アムハラ貴族ラス・DESTA・DEMTOUが行政官に任命された。しかし1930年代の世界大恐慌の影響と、貨幣として用いられていたマリア・テレジア銀貨の価値の下落により、コーヒーの価格は低下し、コーヒーの出荷量自体は増加したにもかかわらずそれが産み出す利益は減じた。1936~41年、イタリアの侵入とそれによる植民地統治により、ジンマ地方の農業生産活動は低迷し、解放後、1950年代になるまで復活しなかった。

### 3-3. デルグ政権期のコーヒー生産低迷

1974年、革命により帝政が崩壊し、デルグ政権が成立すると、土地は国有となり、ジンマ地方内の大規模なコーヒー農園は国有化され、国営のコーヒー農園とされた。それによってジンマ県には5箇所の国営コーヒー農園が開設された。さらに大土地所有者の土地は小作農に配分された。ジンマ県内のコーヒー生産地においては、人口が稠密のため1世帯あたりの保有面積は小さく、また自家消費以上の余剰生産のために労働を投入するインセンティブも制限された。デルグ政権期におけるコーヒー生産の低迷は、国内政策によるところが大きかった。(現在の)ジンマ県ゴンマ郡において、1980年代半ばに調査を行ったカサフンらの報告によると、コーヒーの生産量の低下の原因は、低い収益性、市場制限、生産統制、不安定な土地保有制度の4点にあった。その報告によると、調査地においてコーヒーと主食のトウモロコシと比較すると、1日における労働単価に換算すると、1ヘクタールあたりそれぞれ3.83ブルと8.90ブル<sup>19</sup>となり、収益性という観点からするとコーヒー

<sup>19</sup> デルグ政権期を通して、現地通貨ブルは固定相場制で1ドル=2.07ブルであった。

はトウモロコシの半分以下ということになる。これはコーヒー価格が統制されていたことによる。コーヒーは、生産割当量がきめられており、割当量を充当しないと罰せられることさえあった。またコーヒーを一定量以上生産地以外に持ち出すことはかたく禁じられており、これにより政府は外貨獲得のための輸出量の確保を狙ったのである (Kassahun et al. 1992)。

### 3-4. 現 EPRDF 政権下におけるコーヒー・ブーム

1991年にデルグ政権が崩壊し、エチオピアも他のアフリカ諸国の例に倣って構造調整政策を導入し、為替変動制や市場の自由化などの経済・金融政策を実施した。それにとともに、デルグ政権下で変動が少なかったコーヒーの価格が、国際市場の価格変動の影響を直接受けるようになった。その結果、ブラジルにおける天候不良によるコーヒー価格の暴落がエチオピアのコーヒー価格の高騰につながった1994年のような例外的な年を除き、エチオピアのコーヒーは、中間搾取の温床として商人が富を築く活躍の場と化した。世界経済の周縁部にいる生産者の販売価格とその中心にいる先進国の消費者の購入価格の間の格差に対する問題意識から各地でフェア・トレード運動が展開されるなかで、ドキュメンタリー映画『コーヒーの真実』(2006)が制作された。

この映画のインパクトは大きかった。その後、アメリカ出身のエチオピア人エレニ・ゼウデメドヒン氏が2008年に「エチオピア商品取引システム」(Ethiopia Commodity Exchange, ECXと略す)を立ち上げた。これは、世界の先物取引市場の動きと直接連携しながら、生産者とその情報を共有できるようにアクセス可能にし、生産者と輸出業者の間の価格格差を縮め、いわゆる中間搾取の弊害を取り除くアフリカ初のプロジェクトとして注目された。これによって情報のアクセス不足によって生産者が被っていた不利益は改善された。コーヒーの生産者価格はECX導入以前と以後ではずいぶん上昇した。筆者が2010年8月にゴンマ郡農業局で聴取したところによると、1ファラスツラ(17kg)あたりの殻付きコーヒーの生産者からの買い取り価格は、10年前は60ブルだったのが、今年は200ブルになったという。ちなみに、デルグ政権期では17ブルであったという<sup>20</sup>。このようにコーヒー生産による収益が増加したので、今では穀物栽培のための農地もコーヒー農園に転換させる農家が増えているとのことであった。

## 4. コーヒーの儀礼的利用

### 4-1. 生殖関連儀礼とコーヒー

ふだん私たちが目にする「コーヒー豆」は、コーヒーの木になる果実のなかにある種をさす。一つの実には二つの種子が入っており、その形状が女性の性器と類似しているとして、エチオピアのオロモ社会では生殖関連の儀礼でコーヒー豆がつかわれることが多い (Bartels 1983)。生殖関連の儀礼とは、婚約・結婚・出産にかかわる儀礼をさす。たとえば、かつてジンマ郡ゴンマ郡のムスリム・オロモの間では、自宅で女兒を出産した場合、

<sup>20</sup> 殻を除去したコーヒー豆 (*kishir*) の場合は、10年前はファラスツラあたり90~120ブルであったのが、今年は250~380ブルといわれた。

後産 (*of kolti*) は草 (*sardo*)、殻付きコーヒー (8粒)、牛糞 (*dhoqee saa*) とともに家の中の地面 (出口に向かって左側) を掘って埋める。男児の場合は出口に向かって右側に埋める。男児出産を称揚する価値観があるので、女児が続いたら、男児出産を願って後産を右側に埋めるという<sup>21</sup>。このことから後産を埋めるという行為が、次の出産を誘導する効果を期待して行われる儀礼的行為であることがわかる。この場合、殻付きコーヒーを埋めるのは、牛糞<sup>22</sup>や草とともに、豊穰性・多産性の象徴とされるからにはかならない。

そしてこれはなにも人間のみならず、牛の出産を祝う儀礼などにおいても用いられる。その場合、殻付きのコーヒー豆をバターで煎る「コーヒーの供犠 (*buna qala*)」と呼ばれるものを用いる。これは、土器製の小皿に殻付きのコーヒー豆をバターで煎ったものをさすが、煎る動作は、性交渉を象徴的に表現しているとされ、マチャ・オロモの場合「コーヒーの供犠」を行うことができるのは、既婚女性に限るとされる。

このブナ・カラは、それ自体が独立した儀礼として成り立っているというよりもある種の儀礼の手続きの1つとして行われる。たとえば、ゴンマ郡のオロモの場合、以下のように婚姻儀礼の中で行われる。

#### 4-1-1. 婚約 (*nikaa*) まで

1) *gaafachiisu* (仲人の派遣) : 男性が、仲人 (*hortoo*) 3人をお願いして、目当ての娘の両親のもとを訪ねてもらう。仲人は、原則として親戚か、あるいは仲人の経験のある隣人・友人から選ぶ。この時、仲人は、社交上の建前としてカートを持参し、訪問の目的を伝える。女性の両親の側は、たとえ娘が承諾する意図をもっていることを知っていたとしても、第一回目の訪問で首肯しないし、すべきではないとされている。そこで仲人は第二回目の訪問の約束を取りつけるにとどめ、とりあえず退散する。

2) 15日から1ヵ月後、再び仲人は連れ立って約束の日に娘の両親のもとを訪ねる。その際、年少の者にカートを持たせてやってくる。カートは質の良い、見た目にも美しいもの (約10ブル分) を選んで持参する。だが、この時も娘の両親は首肯しないことが多い。首肯しない場合には、再訪の約束を取りつけて退散する。だが首肯する場合もある。その場合は、3回目の訪問は不必要とされる。

3) なお、第一回目の仲人の訪問があつてから、娘の家族の側では相手の男性の財産や系譜 (*qacee*) を含めた素性に関する情報を独自の人脈を通して調べる。と同時に、以下のような公式・非公式の2つのやり方で相手の男性が娘にとって相応しいかどうか占う。

a) 公式なやり方 : ガラス1杯分の大麦に水をかけて葉で包む。通常は4~5日で発芽するが、この際、どの程度発芽したかによって諾否を決める。この時、発芽しなかったり、あるいは芽が少ししか出さなかったりしたら承認しない。

b) 非公式のやり方 : 呪医 (*tibbi*) あるいはアラビア語の素養のある者のもとを訪れて、男が娘にとって結婚相手として相応しいかどうか、占ってもらう。

4) *jimaa qamaasisa* (カートを噛ませる儀礼) : 第二回目、あるいは第三回目の仲人

<sup>21</sup> インフォーマント : ジンマ郡ゴンマ郡在住の産婆 (HQ、推定65歳)。2003年8月に行ったインタビューによる。

<sup>22</sup> ゴンマ郡において牛糞は、家の床や壁の塗材のみならず、肥料として利用される。*Dhoqee* とは泥を、*saa* は雌牛をさす。

の訪問の際、娘の両親から諾意を受け取った場合、その1ヵ月後くらいに、男性の父親が仲人3人と共に娘の両親を訪ねる。その際、男性の母親が準備した以下の4品を持参する。

- a) 「供犠されたコーヒー豆」をガラス1杯分
- b) 草 (*sardo*) 少々
- c) カート 10ブル分
- d) 現金 (50~100ブル)

これら4品は、仲人や父親ではなく荷物持ちとして同行する年少者に持たせる。娘の家族の家には娘側の親戚も集まり、そこで仲人3人と父親は、娘が準備した料理を馳走になる。料理を賞味した後、コーヒーを飲み、祈祷 (*du'ai*) を挙げ、持参してきた4品を娘の父親の前に差し出す。娘の父親は、それらを前にして祈祷を挙げ、差し出された4品のうち、まず「供犠されたコーヒー豆」をスプーン1杯分口に運び、それを同席者全員が行う。その他の3品と「供犠されたコーヒー豆」の残りは、裏に待機している娘とその母親、女性の親戚連のところを持っていかれる。更に、そこでも少し「供犠されたコーヒー豆」を少し残し、祈祷を挙げたカートの一部とともに男性の父親が布に包んで持ち帰り、男に渡す。

5) このあと、結婚式までの間に犠牲祭 (*Arafa*) やラマダンがある場合には、それぞれの15日前に、男の父と仲人が、娘の父親のところに「分け前 (*qooda*)」として現金 (10~50ブル) を渡しに行く。その際、婚約式の日取りを決めておく。

6) 婚約式 (*nikaa*) : 男性と男性の友人、更に男性の父親とその友人、仲人が連れ立って、娘の家族の家を訪れる。前もって婚約式の準備経費 (*nikaa qopheessa*) としていくらかお金を先方に届けておく。家では、宗教指導者が婚約式の導き手となる。娘の側は、家族の男性成員が対応する。娘は家の裏にひかえておく。宗教指導者は、男性に婚資 (*maar*) をどうするのか訊ねる。S村においては、一般的に次の3つの選択肢がある。

- a) コーヒー農園 1/4~1/2 ファチャーサ (*fach'aasa*)
- b) 雌牛 (あるいは雌の子牛) 1頭
- c) 現金 (200ブル)

男が自分の相場を述べると、娘の側の家族が3回「了承しました (*taqabbaleera*)」と答える。次に宗教指導者は、女性側の男性成員に娘の意思を確かめにいかせる。

#### 4-1-2. 結婚 (*cidhaa*) の仕方

1) 準備時期: 通常結婚式の1~2ヶ月前までに男女それぞれ2~4名ずつに新郎新婦付添い人が選ばれる。付添い人になると、結婚式のために特別に誂えた揃いの服や靴などを新調する必要があり出費が嵩むため、一般に人々は付添い人になりたがらない。付添い人には、既婚未婚を問わず男性 (*marii*) 2~4人、男性と同数の未婚女性 (*addoyye*) となる。新郎新婦は、これらの男女に付添い人になってくれるよう依頼に行く場合、以下の物品を持参する。

- a) 供犠されたコーヒー豆
- b) 現金 10~50ブル

#### 2) 結婚式当日

- i) 婿は付添い人とともに馬に乗って嫁の家に向かう。嫁の家に近づくと、近所のものが

悪態を交えた歌をうたいながらいっこうが嫁の家に近づくのを阻む。それに対して婿の一行は、飴や香水などを散布する。行く手を阻んでいた人々がこれらに群がった隙について一行は嫁のいる家に入る。そこで持参した嫁への贈り物 (*shillimaata*) を嫁の家族や集まった親戚の前で披露する。その後、嫁は仲人 (*jarsa*) のもとに行き、そこで男の付添い人から、付添い人に渡した現金の倍の金額の現金を渡される。

ii) 嫁は婿が事前に準備しておいたラバ (馬よりも気性がおとなしいのでラバの方が好まれる) に乗る、ただ、ラバは生殖能力がないので、嫁はまず雄馬に跨った後にラバに乗り換えるという。婿とその付添い人は嫁とその付添い人とともに婿の家に行くが、それに嫁の兄弟とその友人たちからなる見送り人一行 (*geggeessitu*) が同伴する。後者は、婿と嫁の一行の行く手を阻みながら、すなわちふざけ回りながらついていく。

iii) 婿の家に到着すると、嫁の兄弟と友人の一行は逃げて帰ろうとするが、婿側が懸命に引き止め、宴に出席させる。こうして宴が開始される。その間、嫁は婿の母のもとに入って、出てくる。婿の母はウルルタをもって出迎え、嫁の片方の耳の後ろに水草 (*sardo*) をさし、嫁の額に生バターをぬってやる。

iv) 夜になると、嫁は婿とともに初夜を過ごす、夜中の3時~4時頃、付添い人が初婚部屋に入り嫁が処女であるかどうかを示す白い布を持ち出し、婿の母をはじめ親戚に見せ、祝い金を集める。その時集めた祝い金は、結婚式の経費に当て、残金は嫁に渡す。

以上のように、「供犠されたコーヒー」は、まず婚約の取り決めを行う際に、男性側の母親が用意したものを男性の父親と仲人が女性側に提供し、女性の父親をはじめ、女性本人を含めたその家族が食べることになる。また結婚式に同行を依頼する付き添い人の役を依頼する際にも、嫁と婿がそれを準備して持参する。この場合、供犠されたコーヒー豆は、依頼する相手が拒むことができない状況に立たせるための価値財として用いられる。

結婚にまつわる諸儀礼のほかに、乳牛や牛乳に関連する儀礼においても「コーヒー豆の供犠」は重要な場面となっている。たとえば、雌牛が出産したら、産後2週間までは子牛に乳を飲ませ、2週間たったら「コーヒー豆の供犠」を行い、それ以降、人間利用のために搾乳が行われる。また初産した雌牛の乳は、2週間後から搾乳し始め、以降産後1ヶ月までの乳を一部とっておき、ヨーグルトにする。それを初めて食べる儀礼を「ヨーグルトを食べる (*itittuu nyachuu*)」儀礼というが、そこでも「コーヒー豆の供犠」が行われる。

#### 4-1-3. 搾乳はじめの儀礼 (*itittuu nyachuu*、「ヨーグルトを食べる」儀礼)

雌牛が最初に出産したとき、乳を人間に搾られることに慣れていない。そのため、まず産後14日間は乳搾りをせず子牛にだけ乳を飲ませる。産後2週間したら、1本、2本、3本・・・と搾る乳首を増やしながら、乳搾りという行為に慣れさせる。この習練期間はやはり2週間かけて行う。その間に搾った乳に、香りのよいバジル (*keefoo saa*, *Ocimum basilicum*) の葉を入れて瓢箪容器のなかに保存しておく。この乳でチーズ、バターとヨーグルトを作る。

儀礼の前日、隣り近所に「明朝一緒にコーヒーを飲みましょう」と誘って回る。儀礼の当日の朝6時になり、隣近所の住民が集まると、まず手洗いをしてからトウモロコシの練り粥に習練期間中にためておいた乳で作ったバターとチーズを入れて素手もしくは牛角製

のスプーン (*faldhana*) でそれを食べる。かならず練り粥は真ん中のバター・チーズの部分から食べるべきとされ、端から食べると、「牛をうつのか (*saa tumta*) ?」とって叱られる。食べ終わると、手もしくはスプーンについた練り粥の残りを洗い流さずに草で拭き取る。

つぎに 10 時頃、「コーヒーの供儀」を始める。まず既婚女性が殻付きのコーヒー豆の端を歯でかみとり、土器製の小皿 (*t'abbe buna*) にそれを入れて火にかける。そこに水を少し加え、その水が沸いたら、沸いた水を別の容器にうつしておく。水を除いたコーヒー豆にバターを加える。バターが煮えたら、先ほど容器にとっておいた水に加える。バターで煮た照りのよいコーヒー豆を長老がみて、「この子牛は (将来) よい子牛を生むだろう」と占う。コーヒー豆は皿に移して、参席者全員に行き渡るようにし、それを食べる。そして先ほど別容器にとっておいた水とバターの混合液を、手やスプーンを拭いた草に注ぎ、その草を、家の中で飼われている乳牛に食べさせる。参席者たちはコーヒーを食べ終わったら、作っておいたヨーグルト (*itittu*) を食べる。

だが、昨今のイスラーム復興主義の影響の広まりのもとで、「ブナ・カラ」の利用が制限されていることは付記すべきであろう。さきに述べた婚約式や結婚式における「ブナ・カラ」の利用は、イスラーム復興主義者の影響の強い集落においてはもはやみられない<sup>23</sup>。ブナ・カラだけでなく、「オロモ的儀礼」の多くが「イスラーム的」でないとして斬り捨てられているのである。

#### 4-2. コーヒーの宗教的利用

コーヒーを宗教儀礼で使うことは、イスラーム受容以降のことではない。オロモは山や洞窟、大木、泉などを神聖視するアニミズム的信仰を保持しているが、そうした「聖地」においては、動物 (羊や牛) をはじめ、バター、草、コーヒー、香などが供えられる。

19 世紀前半イスラームが受容の初期段階において、「ギベ 5 王国」の一つ、リンム王国において次のような儀礼が行われていたという報告がある。

人口の大半がイスラーム (Mohammadanism) に改宗しているにもかかわらず、フダル月 (Hedar) のミカエル (Michael) 祭の日<sup>24</sup>には依然として『ワク (*Wak*)<sup>25</sup>』への供儀は行われる。聖樹 (*Woda*) はベチヨ (Betcho) にある。女性は一切そこに近づいてはならないとされ、その聖樹の木陰で聖職者は任じられる。たとえ預言者の信者だろうと迷信的に血を供える。信者が何千人も集まると、政治的役職者 (*Lubah*)<sup>26</sup>が群集の上に、最初はビールを、次に生のコーヒー豆とバターを、そして最後に小麦粉とバターをごち

<sup>23</sup> たとえば、筆者が調査を行ったゴンマ郡の S 村においては、現地民が「ムフティ (ファトワ<=法判断>をくらすことのできる人)」の尊称で呼ばれている人物の影響のもと、イスラーム復興主義が確実に住民の間に広まっており、1993 年に調査を行ったときに行われていた儀礼の多くが放棄されていた。

<sup>24</sup> エチオピア暦の第 3 (フダル) 月のミカエル祭 (12 日) は、グレゴリウス暦では 11 月 21 日に相当する。

<sup>25</sup> 「ワク」もしくは「ワカ」とは、オロモ語で天もしくは神を意味する。

<sup>26</sup> ルバとは、オロモが伝統的に保持していたガダとよばれる年齢階梯制にもとづいた政治体系でいうところの政治的役職者をさす。

や混ぜにしたものを散布する。そして白い雄牛が屠殺され、その血も散布して儀式は終了する。後はそれを食べたり飲んだり、酔っ払ったりするだけである（波線は筆者追加）（Harris 1844: 56）。

イスラームが当該地域に広く浸透した今日においては、上記に報告されているような儀礼的行動はもはやみられないが、それでも筆者が最初にジンマ県を訪れた 1990 年代半ばまでは、人目につかないような洞窟、巨石、大木の下で、祈祷をあげながら香を焚いたり、コーヒーを沸かして飲んだりする習慣は残っていた。すなわち 19 世紀半ばにおいて「ブナ・カラ」あるいは「コーヒーとバター混合物」が儀礼のなかで占めていた位置を、20 世紀末にはコーヒー飲用文化にとってかわられていたということになる。

このようなコーヒーの利用法の変化は、祈祷集会においてもみられる。

#### 4-2-1. 祈祷集会とコーヒー

19 世紀後半、ジンマ王国の南東部にあるゲラ王国にキリスト教の布教のためにイタリアからやってきたカプチン会修道士レオネ（León des Avancher、1879 年ゲラにて没）からチェッキが聞き取ったゴンマでの儀礼の様子を以下に記そう。

ゴンマには他の王国同様、イスラーム学者（*fokera* や *Scech*）ほどの尊敬を集めないマラキ（*malaki*）と呼ばれるペテン師（*ciurmadori*）がおり、あらゆる病を・・・草からの抽出物や唱え事を用いて治すふりをする。以下に、P. Leon des Avanchers が語ってくれた例を示そう。

『私がゴンマを通過した時のことである。主が病気になり *tolfata*（贖罪）を行おうと考えた。そこで主はジンマ（Gimma Caca）に、ガルバーボ *garbabo* と呼ばれる *bethel*（*Celastrus Edulis*）を買いに奴隷を 1 人遣いにやった。この植物は精神に活力を与えると、ガッラ（オロモの蔑称）は信じている。奴隷が戻り、家から一定の距離に近づくやいなや：平安を（*Naghe! Naghe!*）と叫び始めた。引き続き奥方が走り出てきて歓喜の叫び（ウルルル！）を挙げ始めた。小屋の入口に到着すると、奴隷はひざまずいてキンマ（*bethel*）の葉を主人に渡した。主人はそれに繰り返しキスをした後、妻にバターを塗ってもらい、一部を戸口のところに、一部を住居の内側の仕切りに置いた。これは精霊（*ajana*）への供え物である。翌日、5 人の老人が呼ばれてやってきた。これら老人はいわゆる友人（*uaddag*）でボラナ Borena（純粋オロモ）の様々な部族なら誰でもよい、オロモ長老（*gilla*）なら誰でもよいがイスラーム学者（*fokera*）であってはならない。だから儀式は昔ながらの儀礼にしたがって完遂しなければならない。参加者は、頭にターバンを巻き、手にはオデッサ（*odessa*）と呼ばれる枝をもつ。草の上に最年長者を囲んで腰掛け、家の主人は一掴みのキンマの葉を手を持ち、神のご加護を祈り、罪の告白をした上で、自分が病から快復するようにお祈りする。その後、手伝いの者達が主人に罰としてキンマを家の中と家に通じる道に沿ってばら撒かせる。それから最年長者は、葉の束の先端を一緒にもって、厳粛にそしてゆっくりと次のように叫んだ、「ガルバーボよ、聞き届けてくれたまえ。私たちのために邪悪な病から（この者を）救いたまえ（*Garbabo, nama gura cabda noti tolli docuba hamo nuti olci!*）」。そして、飢饉や疾病などあらゆる

事柄について、更に病人の意図に応じてその願い事を述べて、天と地、神と悪魔をかなり無頓着に混同しながら祈願の言葉を述べた。それからキンマは出席者全員に配られ、人々もキンマに対して願掛けをし、願い事を述べた。その間、一人が単調な哀歌を歌い始めると、別の人が手拍子を取りはじめた。最後にコーヒーをバターで焦がしておいたものと、ビールが出され、家の主がそれを神に両手で容器を空に持ち上げて奉げた後に配った。同じ祈願の文句をマラキ全員が繰り返し述べた。『わたしは取るに足らぬ神の人です。私の祖先は神の加護を願い、呪いをかけ、病を取り除く力を受け取りました。そして私もまた神の加護を祈り、呪い、そして病を取り除くのです。さあ、Bemba よ、Sinca よ、Giccio よ、手伝いにきておくれ。』ゴンマ王国には、住民が崇拝の対象とする丘が2つある。その一つが Sinca と呼ばれ、アガロ Agaro の王宮 (*masera*) の近くにあり、もう一つは Ouoino の *masera* の近くにあり、Bemba は別名「国の番人 (*kella egdubia*) 」と呼ばれている。言い伝えによると、かつてこの丘の上に予言者 (*ambiota*) の住いがあり、今はそこには廃屋しか残っていないが、その中には大蛇がいて、オロモが病気のとときに供犠としてヤギを奉げると、その血とビールを飲むためだけに戸外に出てくるといふ』(波線、斜字化は筆者追加) (Cecchi 1886: 241-242)。

この文章にでてくる「ガルバーボ *garbabo* と呼ばれるベテル (*bethel*) (*Celastrus Edulis*)」とは、カート (*Catha edulis*) をさす。ここで興味深いのは、病を除去するために開かれたこの祈祷集会に呼んでよいのは、オロモの長老 (*gilla*) なら誰でもよいがイスラーム学者 (*fokera*) であってはならない、としているところである。祈祷の際に呼びかけの対象となっているのは、精霊 (アヤナ) であり、具体的には「Bemba よ、Sinca よ、Giccio よ」と呼ばれている霊たちである。このことから、この祈祷集会が「オロモ的」な仕方で、主として精霊を対象にカートを介して呼びかけが行われ、「コーヒーをバターで焦がしたもの」とビールが捧げられることがわかる。そして、この祈祷集会がイスラーム学者 (*fokera*) を排除する仕方で行われたことから、19 世紀半ばには「コーヒーをバターで焦がしたもの」・ビール・カートが使われる「オロモ的」祈祷集会が、飲むコーヒーとカートを用いる「イスラーム的」祈祷集会が併存していたことが推察されるのである。そしてイスラーム化が深化するにしたがい、前者が後者に駆逐される仕方で衰退したのではなかろうか。

現在ジンマ地方に限らず、エチオピアのムスリム諸社会で広く行われている祈祷集会は「イスラーム的」祈祷集会の方である。コーヒーを飲むことは、カートを噛むことと並んでムスリムの祈祷集会においては欠かせない。祈祷集会において、まず宗教指導者もしくは年長者がカートを前にして祈祷をあげた上で、それを参席者全員に配ることから始まる。カートは祈祷集会の主宰者のみならず、とくに祈祷を上げてもらいたいと考えている参加者が持参する。祈祷をあげる間、参加者は全員、願いがかなうようにと両手を掲げて「アーメン」と繰り返し唱える。カートは、祈祷を通して神からもたらされた恩寵 (バラカ) がやどると理解される象徴媒体となる。すなわち祈祷をあげたカートを噛むことによってバラカを体内に摂取し、外面のみならず身体の内部も浄化し、神に向かう態勢を整えるのである。祈祷集会には乳香や線香がふんだんに焚かれ、カートの効用で雰囲気が高まった頃、コーヒー・セレモニーが行われる。これはコーヒー豆を煎ることから始まり、参席者全員にコーヒーを 3 回振る舞うまでを含む一連の慣習的行為をさす。ここで重要な要



素とされるのは匂いである。コーヒー豆を煎った時にでる香ばしい匂いで精霊が集まると解され、匂いを楽しむように参加者の前に置かれた、煎りたてのコーヒー豆の上にカートの枝を置くのは、精霊のなかでも悪霊が寄って来ないようにするためのものとされる。このようにコーヒーとカートの間には補完的關係がみられ、常にセットで用いられるのである。

#### 4-2-2. ムスリム聖者とコーヒー：文化英雄、サイイド・ナスラッラー

南西部オロモにおいて、コーヒーを煎って挽いて煮出して飲む習慣は、ムスリム宗教指導者が導入したと説明される。とくにジンマ島のムスリム・オロモの間でしばしば耳にするのはムスリム聖者として崇敬されているサイイド・ナスラッラー (Sayyid Nasrallah) が始めたとする逸話である。このサイイド・ナスラッラーは、コーヒーを飲む文化のみならず、カートを噛む文化やジャコウネコ飼育とも関連してしばしば言及される、文化英雄として位置付けられる (Ishihara 2003; 石原 2005)。

##### <文化英雄としてのサイイド・ナスラッラー>

サイイド・ナスラッラーの周りに7人の聖者が集まったが、何もすることがなく退屈した。そこで、なぜ自分達が退屈しているのか話し合った。そこに鳥がやってきてサイイド・ナスラッラーに話しかけてきた。サイイド・ナスラッラーは(鳥の言葉が)わかったが、他の聖者たちはわからなかったので、サイイド・ナスラッラーに訊ねた。サイイド・ナスラッラーはその問いに答えずに、鳥と一緒に、一本の木に上って枝の上に座った。鳥はその木の実をついばむと、枝から降りて赤い(コーヒーの)実をチュウチュウと吸って食べて種を捨てた。ナスラッラーは、その種をもって帰ってきて言った、「我々の預言者は、コーヒーを飲まなかった。その薫りをかいだだけだ。だからコーヒーは良い薫りがする」。

だが、聖者たちはそれを搗く道具も、飲む器も持っていなかった。そこで、一人の聖者が食事をした(木製の)食器をもってきて、それを火の上にかけると、神はそれを鉄器に変えた。コーヒー豆が煎りあがった。だが今度は水がなかった。そこで礼拝用の水を使った。(コーヒーを)飲む容器もなかった。そこでヒョウタン (*masaaqula*) の蓋を使って飲んだ。コーヒーを飲んだ聖者たちは喜んで、こう言った、「我々は薬 (*dawaa*) を発見した、もう二度と退屈はしないだろう」と。その後、サイイド・ナスラッラーは、他の聖者に言った、「さあ、コーヒーの豆 (*qishiri*) を私をもってきたので、コーヒーを点てる道具を集めてきなさい」と。そこで聖者たちは諸国を行脚して戻ってきた。一人は木臼 (*moyye*)、一人は煎る道具 (*eelee*)、一人はジャバナ<sup>27</sup>、一人は火、一人は木槌 (*muka tum*)、そして一人は水をもってきた。だが、人間は狡い (*hammaa*) 生き物である。(人間は) 聖者たちが道具を探して歩き回っている後を見つけ、こっそり覗き見た。その後、聖者は座るやいなや、互いに目配せして一人が覗き見しているその人間を呼んできた。覗き見ていたことがばれて人間は赦しを乞うた。(そこで聖者は人間に)「こちらに来て、(コーヒーを) 火の上にかきなさい」と命じた。(人間は) コーヒーを洗い、煎って……。その後、(人間は)「インジェラ (*buddeen*) があるので(コーヒーの付け合せに) もってこようと思うのですが、

<sup>27</sup> コーヒーを沸かす土器。

ちょっと遠くにあります」、と言った。聖者たちは「どこにあるのだ？」とそれがある場所を訊ねたので、人間はその在り処を伝えた。すると（聖者たちは）精霊たち (*jinnoota*) を派遣してとってこさせた。

その後、コーヒーの種は、サイド・ナスラッラーの崇敬者のムハンマド・ウォダージ ヨ Muhammad Wodajo という男によって播かれた。最初にコーヒーが植栽されたのは（サイド・ナスラッラーの墓廟のある）リンム・サカ地区のタナボ Tanabo、次にゴンマ地区北部のガンボ Gambo (Sadacha)、そしてその後リンム・サカ地区北部のブナ・サッデーカ Buna Saddeeka であるとされ、これ以降、各地でコーヒー植栽が広まったとされる<sup>28</sup>。

これと類似の伝承をリンム地方で調査したボツソラスコも伝えている。ボツソラスコが「アルジェリア出身の商人<sup>29</sup>ナスル・アッラー (Nasr Allah)」として説明しているのは、聖者サイド・ナスラッラーに相当すると思われる<sup>30</sup>。ボツソラスコによると、ジンマ県内の5箇所のコーヒー農園<sup>31</sup>のうちリンム地方<sup>32</sup>にある3箇所のなかでセントゥ農園のある場所がコーヒーの発祥地としてあげられる。リンム地方内で古くからコーヒーが自生していた場所として名前があがっているのは、Baddaa Kallo, Baddaa Miyaa, Baddaa Dallacha, Gejib と Ursa Gotaa であり、これらは「Bedo Moti (Baddaa Moti)」と呼ばれていた (Bossolasco 2009: 69)。「バッド・モーティ」とはオロモ語で「王の森」をさす。すなわち王国時代からあったということになる。

ただ以下に示すように、「コーヒー発祥地」をめぐる「政治ゲーム」のなかで、リンム地方はジンマ県内での候補地からも落とされてしまう。

## 5. 文化資源としてのコーヒー：コーヒー発祥地をめぐる問題

アジスアベバから南西に340キロほどにジンマ市があるが、そのジンマ市の入口に、巨大なジャバナからコーヒーが茶碗に注がれている像が建設された (図1参照)。

その像の下には「ジンマ、コーヒー発祥地」という看板が掲げられていた。ところが、発祥地について、エチオピア国内でよく耳にする「コーヒー発祥地」は「コーヒーcoffee」の語源と称されているカファ (Kafa) 地方である。カファとは、ジンマ県の南側にあるゴジェブ川を超えたところに位置し、そこは南部諸民族州に属する。ゴジェブ川をはさんだ (カファ県とジンマ県に跨る) 地域には広大な森林が残っており、近年植物遺伝学者の研

<sup>28</sup> もっとも、コーヒーを「初めて植栽した場所」については諸説あり、同じサイド・ナスラッラーの功績として他のインフォーマントから筆者が聞き取ったものとして、①Saddeeqa、②Tannabo あるいは Buna Miyaa、③Badda Bunna、という情報もあった。

<sup>29</sup> 「商人 (*naggadie*)」は、19世紀においては、他地域から移住してきたムスリムあるいはムスリム宗教指導者を意味している (Ishihara 2006)。

<sup>30</sup> 筆者がサイド・ナスラッラーの墓廟の墓守から聞き取ったところによると、サイド・ナスラッラーはエジプトのザカズィク (Zaqaziq) 出身である (石原 2009)。

<sup>31</sup> デルグ政権下では国営コーヒー農園であったところは、現在民営化されて、政府系企業体であるコーヒー・プランテーション開発エンタープライズが経営している。ジンマ県内のコーヒー農園は、①ゴンマ I (1,454ha)、②ゴンマ II (1,150ha)、③コサ (1,333ha)、④セントゥ (1,602ha)、⑤グメル (1,861ha) である。③～⑤はリンム地方内にある。

<sup>32</sup> ここで便宜上「リンム地方」とよんでいるのは、行政区分上はジンマ県リンム・サカ郡、リンム・コサ郡、チョラ・ボトル郡から構成される。

究により、コーヒーの野生種がそこで発見されている。昨今、この「発祥地」をめぐる論争は、文化資源の所有をめぐる論争であり、ある種の「政治ゲーム」の様相をなしている (Bossolasco 2009: 68)。

そもそもコーヒー発祥については、不明瞭な部分が多く、しばしばコーヒーの入門書などで引用される「カルディの伝説」の曖昧さにそれが顕著に表れている<sup>33</sup>。



図1 ジンマ市入口に建てられたジャバナの像と「*Jimma yä bunna mägāñña* (ジンマ、コーヒー発祥地)」と記した看板 (2010年8月筆者撮影)

### 5-1. 「カルディの伝説」に内在する矛盾点

コーヒーの起源について西洋の文献でよく取り上げられるのが「カルディの伝説」である。エチオピア政府も、「コーヒーの発祥地」であることを観光PRの一つに用いており<sup>34</sup>、「カルディの伝説」にも言及している<sup>35</sup>。だが、この伝説は、国民レベルでは知られておらず、国内で広く受け入れられているとはいえない<sup>36</sup>。それにこの伝説はコーヒー発祥地をエチオピア南西部であることを裏付ける証拠であるともいいがたい。

さまざまなヴァージョンがあるが、「カルディの伝説」はおおむね以下の要素から構成さ

<sup>33</sup> たとえば Pendergrast (2010: 3-4) 参照。

<sup>34</sup> エチオピア文化観光省のウェブサイトにおいて、エチオピアは「人類揺籃の地、コーヒー発祥の地、アフリカ唯一の文字起源地、アフリカの首都」として紹介されている (<http://www.tourismethiopia.gov.et/English/Pages/MessagesfromtheMinister.aspx>、2013年2月5日入手)。

<sup>35</sup> エチオピア文化観光省のウェブサイトでは、エチオピアの「人と文化」の特徴の一つに「もてなし」をあげ、そこにコーヒーについて言及している (<http://www.tourismethiopia.gov.et/English/Peopleandculture/Pages/Hospitality.aspx>、2013年2月5日入手)。

<sup>36</sup> たとえば、エチオピアでスターバックスに酷似したロゴを用いているとして非難されている新設の「カルディーズ (Kaldi's)」の社長アスラット氏は「カルディ」についてはスターバックスのウェブサイトですれをみるまでは知らなかったと証言している (2005年7月22日付けニューヨーク・タイムズ誌)。

れている<sup>37</sup>。

①エチオピア南西部カファでの出来事である。

②ヤギを放牧していたカルディという名の青年が、ある日、自分が見張り番をしていたヤギたちがある木の実を食べて踊っているのを見て、不思議に思って、自分でもそれを試してみると、気分が高揚した。

③そうしたカルディの様子を、たまたま通りがかった修道僧がみかけた。この顛末を聞き知った修道僧が、それを自分でも試すとその夜のきびしい修行を難なく終えることができたばかりか、頭がすっきり覚醒していることに気付いた。

この伝説の奇妙さは、まず第一に、エチオピア南西部においてヤギのみを放牧につれていくという行為がほとんどみられない点である。最も一般的にみられるのが牛の放牧であり、小家畜である羊とヤギは放牧に連れて行く必要があるほど、大量に飼育する世帯はなく、放牧に連れて行く場合でもヤギだけというのはほとんどなく、羊とヤギを一緒に行動させるだろう。だがここでなぜヤギなのか、を考えると興味深いのが、ヤギは羊と違い、カートの葉を好物とする点である。ヤギがカートを好むことは、よく知られており、カート好きの人間を「ヤギみたい」として揶揄することはよくある。そしてカートとコーヒーが、祈祷集会のなかで補完的な役割をもっていることはすでに述べた。

第二に、コーヒーの実を食べただけでは気分は高揚しない。コーヒーの赤い実は、エチオピア南西部の子供たちが食べるのをよくみかけるが、とくに高揚しているようには見受けられないし、筆者も食べてみたが、甘酸っぱいだけでとくに高揚感はなかった。

第三に、「カルディ (Kaldi)」という名前がどこの民族、あるいは何語なのか不明である点がある。少なくともオロモ語でもカファ語でも、ましてやアムハラ語ではないようである。

第四に、カルディが「修道士」のところにコーヒーの実をもっていった、とあるが、「修道士」とはキリスト教のそれであるとするならば、エチオピア南西部にはキリスト教が最初に導入されたのは17世紀であり、教会が建設されただけで修道士がいたとは考えにくい。

それでは、この伝説はどこからくるのか。「カルディの伝説」がはじめて西洋世界に伝えたのは、東方を広く旅して回ったとされる Faustus Naironus Banesius という17世紀のマロン派キリスト教徒であり、ラテン語で「コーヒーについての言説 (De Saluberrima potione Cahue seu Café nuncupata Discursus)」(1671) という論説を著わしている。だがこの論説には、「カルディ」という固有名詞は登場せず、しかもエチオピアという地名も出て来ない。そこに出てくる逸話は以下の通りである<sup>38</sup>。

①ラクダ、(もしくはいくつかの報告によるとヤギ) の世話をする者が、「アヤマン王国、もしくはアラビア・フェリックス (Arabia Foelix)」のある修道院の宗教的人物につぎのよ

<sup>37</sup> ここであげた例は、エチオピア文化・観光省のウェブサイトにものっていたヴァージョンの要約である (<http://www.tourismethiopia.gov.et/English/Peopleandculture/Pages/Hospitality.aspx> 2013年2月5日入手)。

<sup>38</sup> 本論説は英語訳 (1710) が出ている。

うにこぼした。

②自分が世話する家畜は、一週間に2~3回、夜通し寝ないでいるだけでなく、奇妙な仕方ではねて踊り回ったりしている。

③修道院の院長は、これに興味をもつとともに重大なこととして、これが家畜の食べ物に由来すると考えた。そこで院長は他の修道士たちとともに、家畜が放牧する場所で辛抱強く見張っていた。

④すると、その場所にある種の草木がはえており、その実を家畜が食しているのを発見した。そこで、院長はその実を自ら試してみようと、その実を摘んできてそれを湯に入れて沸かして飲んでみた。すると、一晩中寝ずに起きていることができた。

ナイロヌスが伝えたこの伝説に出てくる「ラクダもしくはヤギの世話をする者」が、どのようにして「ヤギ飼いかルディ」に、そして「アヤマン王国」すなわちイエメンが、どのようにして「エチオピア」にすり替わったのかは謎である。それはともあれ、「カルディの伝説」の疑わしさについては、「ナイロン（ナイロヌス）のカフェインに刺激された文学的想像」によるもので「初期のヨーロッパ人のコーヒー飲みに受け入れられて広まった」にちがいないと指摘されている（Weinberg & Bealer 2001: 4）。コーヒーがヨーロッパ世界に伝わった大航海時代、ヨーロッパ人は東方にあるキリスト教徒同胞が建てたとされた「プレスター・ジョンの国」をエチオピアとみなしていた。ヨーロッパ人は、自分たちが常用するようになった東方由来の飲み物の起源を「アラブ」「イスラーム」にあるとするよりも、同じ東方にあるが同じキリスト教徒であるエチオピアにした方が居心地がよかったのかもしれない。

このようにコーヒーの発祥地をめぐる定説がないからこそ、エチオピア南西部で「コーヒー発祥地」をめぐる議論がもちあがる余地ができたといえる。それは南部諸民族州カファ県とオロミア州ジンマ県の間で展開されているものである。

カファ県がコーヒーの発祥地であると主張する根拠は、二つある。一つがコーヒーの語源が「カファ」であるという点であり、もう一つがカファ県に残存するコーヒーの野生種の発見である。コーヒーの語源が「カファ」であると主張しているのは、なにもカファ県にとどまらず、エチオピア政府も対外的にはそのように宣伝している。もっともこの一見音声学的類似が喚起する自明性に疑義を挟む余地はある。

そもそも「コーヒー (coffee, cafe)」が語源としているのはアラビア語の「カフワ *qahwa*」であるという主張である。カフワとは「嫌悪、食欲がない、慎む」という意味合いをもち、コーヒーが現れる以前から存在していた。本来「カフワ」はワインをさしていたとされ、コーヒーだけでなくカートもカフワに分類された。臼井によると、「ワインをカフワと呼んで愛飲していた人々」は、食事を避けるために軽い白ワインを飲んでいて、そこに新たに誕生したコーヒーが、一時期、カートと「競い合った」末にカフワの名称を占有した（臼井 1992: 13）。この説明にしたがうならば、カファ (Kafa) という地域名・民族名とアラビア語のカフワ (*qahwa*) の間には何の関係もないということになる。むしろアラビア語がヨーロッパの言語に訳された後に「カファ」と音声学的に近くなったということになり、ヨーロッパ世界というフィルターを通してエチオピアに注目が集まった点において「カルディの伝説」と類似している。

カファとコーヒーの音声学的近似性が偶然の賜であったとしても、現在カファ県にはコーヒーの野生種が残存しているのは事実である (Schmitt 2006)。したがってエチオピア政府としては、対外的にもコーヒーの発祥地を「ジンマ」よりも「カファ」と認定した方が容易であったといえる。

## 5-2. コーヒーの発祥地をめぐる「政治ゲーム」

エチオピア暦 2000 年 (西暦 2007/2008 年) をきっかけにコーヒー発祥地をめぐる「政治ゲーム」が展開された。この「ゲーム」には、博物館建設・記念日の制定・コーヒー発祥地を証明するために動員された言説やモノ、などの要素がかかわっている。

### 5-2-1. 南部諸民族州カファ県の「国立コーヒー博物館」建設計画

2007 年 9 月 11 日～2008 年 9 月 10 日までは、エチオピア暦で 2000 年に相当する。2000 年 (ミレニアム) を迎えるにあたってエチオピア連邦政府は「ミレニアム局」を設立し、7 つのミレニアム・プロジェクトを策案した<sup>39</sup>。その一つに「コーヒーの発祥地」が含まれ、その場所に選ばれたのが、南部諸民族州カファ地方であった。カファ地方は、主にカファ語を話者とする人々が住んでおり、豊かな自然林が残されており、マンキラという場所がコーヒーの発祥地に指定されたのである。そして同地方の行政的中心地であるボンガ市に「コーヒー博物館」を建立する計画がもちあがったのである。コーヒー博物館は、2008 年に着工し、エチオピアで大資本家として活躍するサウジアラビア国籍のムハンマド・アラムディンが代表をつとめる (株) ミドロック (Midroc) 社が建設費の半分を出資するとして注目を集め、その着工式典にはエチオピアのギルマ・ウォルデギオルギス大統領も出席した。

この「コーヒー博物館」は単にカファ地方におけるコーヒー生産や消費文化、コーヒーに関連する物質文化を紹介・展示するだけではなく、国内の各民族の利用法も常設展示の対象としており、世界を視野に入れた国際性を目指している。アジスアベバ大学エチオピア研究所附設の博物館の学芸員もアドバイザーとして関与しており、毎年エチオピア暦ハムレ月 (第 11 月) 1 日 (西暦 7 月 8 日) を「コーヒーの日」と定め、その日には各種催し物を行っているという。筆者がカファ県知事にジンマ県の「コーヒー発祥地」としての主張について尋ねると、「その主張は、ジンマが帝政期、カファ州の中心地であったことに依拠しており、それは (エチオピア暦) 1942 年 (西暦 1949/50 年) 以降のことである。」と論駁され、この論争が行政区分上の問題であるという理解を明らかにした<sup>40</sup>。

もっとも 2011 年中に完工しているはずのこの博物館は、2012 年 1 月に筆者が訪れた際には、建設工事が「セメント入手困難のため」中断されており、完成まであと半年～1 年はかかるとのことであった<sup>41</sup>。

<sup>39</sup> 7 つのプログラムは、「コーヒー博物館」の建設以外に、「人類揺籃の地」博物館の建設、音楽祭などが含まれる。

<sup>40</sup> インフォーマント：カファ県知事クフレ・ガブレマリアム氏 (2012 年 1 月 2 日に行ったインタビューによる)。

<sup>41</sup> インフォーマント：カファ県知事クフレ・ガブレマリアム氏。



図2 カファ県ボンガ市で建設中の「国立コーヒー博物館」の完成予定図<sup>42</sup> (2012年1月2日筆者撮影)

### 5-2-2. オロミア州ジンマ県ゴンマ郡の「コーヒー発祥地」

一方、ジンマ県においても「コーヒー発祥地」をめぐり、論争が起きていた。ジンマ県において「コーヒー発祥地」として候補にあがっていたのは、リンム・コサ郡ストゥとゴンマ郡チョチェであった。この二つの候補地のうちジンマ県が「コーヒー発祥地」として選定したのはチョチェの方であった。チョチェは、「コーヒー発祥地」として公式に認定される上で必要であった「客観的」な事実を提示できた。その「客観的」な事実が何であるのかを知るために、2010年8月、筆者は「コーヒー発祥地」として公認されたチョチェ行政村にあるカッタ・ムドゥガ集落を訪れた。

ジンマ市から南西に向かう道を45キロほどいったところにゴンマ郡の中心地アガロ町がある。アガロ町にたどり着く5キロほど手前に北方に曲がる道がある。この北に向かう道を進みほどなくすると左手にカッタ・ムドゥガの場所を示す看板があった(図3)。

ここからコーヒーの森のなかに進む小道があり、徒歩で1キロほどいくと岩盤だらけの開けた場所に出た。雨季だったので岩盤には水たまりができており、そこで衣服を洗っている男性に話を聞くことにした。男性は、カッタ・ムドゥガ在住のアフマド(47)といった。彼は次のような逸話を話してくれた。

<sup>42</sup> 看板には「ボンガに建設予定の国立コーヒー博物館、エチオピア・ミレニアム祭開催事務局」とある。



図3 チョチェ村のカッタ・ムドゥガの場所を案内する看板 (2010年8月筆者撮影)

ここにヤギや牛を放牧していたカーリド (Khalid) という男がいた。ある日、放牧中、一匹のヤギが興奮状態 (*marqana*) にあったので、よく観察すると、ある種の葉を食べているのを発見した。その葉は、人にも効果があるにちがいないと思い、また葉に効果があるならばその実も人に効果があるのではないかと、思い、食べてみたらたしかに効果があった。その実は、たまたまウオロから当地を訪れていたムスリム宗教指導者 (*qallicha*) を介してアラビアなどに広く知られるようになった。ここがコーヒー発祥の地であることは、ドイツで発見された14世紀の文献にも書かれてある。

「カルディの伝説」とよく似た伝説ではないか。登場人物の名前も「カルディ」がムスリム名の「カリド」にすり替わっており、「ヤギの放牧」も「ヤギや牛の放牧」、「ヤギが実を食べていた」のが「ヤギが葉を食べていた」に替わっているだけである。それを証拠づけるかのように、岩盤の一角にできた「ヤギの足跡」まで見せてくれた (図4)。うがった見方をするならば、この地のムスリムが「カルディの伝説」を地域の実情に即したヴァージョンに変換したともみてとれる。しかもこの伝説の信憑性を高めるかのごとくに「14世紀のドイツの文献に書かれてある」という後付も忘れていない。





図4 ヤギ飼いカリドが飼っていた「ヤギの足跡」(2010年8月筆者撮影)

カッタ・ムドゥガが「コーヒー発祥地」に選定された経緯についても聞いてみた。どうやらエチオピア暦1995年(西暦2002/2003年)に、ゴンマ郡の役場から、郡内の39の行政村(カバレ)の代表に対して召集がかけられて、コーヒー発祥にまつわる場所や伝説について詳しい長老を連れてくるように、という通達があったらしい。その集会にアフマド氏自身も出席して、父アッバ・ガロ・アッバ・ギベから聞いたという上記の伝説を披露したところ、ほかの長老たちは「他のこととまぜこぜにして」自分ほど明瞭に伝説を語るものがいなかったので、結局カッタ・ムドゥガが「コーヒー発祥地」として選定されたという。もっとも筆者には、ゴンマ郡内で「コーヒー発祥地」として公認を受けた後、どのようにジンマ県レベルでも、他の候補地(リンム・コサ郡ストゥなど)をさしおいて公認されるようになったのかについては、聞き取ることができなかった。

そしてエチオピア暦1999年(西暦2007年)末、当時のオロミア州知事アッバ・ドゥラが出席して、カッタ・ムドゥガを「コーヒー発祥地」として公認し、そこに「コーヒー博物館」を建設する工事の着工式が執り行われた(図5)。だが、その後、工事はやはり資金不足のため中断され、2010年8月の時点では建設中の外壁も野ざらしのまま放置されていた(図6)。それでも2010年9月には、ジンマ県が「コーヒーの日」として選んだエチオピア暦パグメ月(第13月)1日(西暦9月6日)に「コーヒー祭り」を盛大に祝う予定になっており、カッタ・ムドゥガのみならずゴンマ郡アガロ町ならびにジンマ県ジンマ市でもコーヒーに関するシンポジウムを開催するなどのイベントを予定していた<sup>43</sup>。

<sup>43</sup> インフォーマント：ジンマ県知事ムスタファ・アッバ・スィマル氏(2010年8月10日に行ったインタビューによる)。

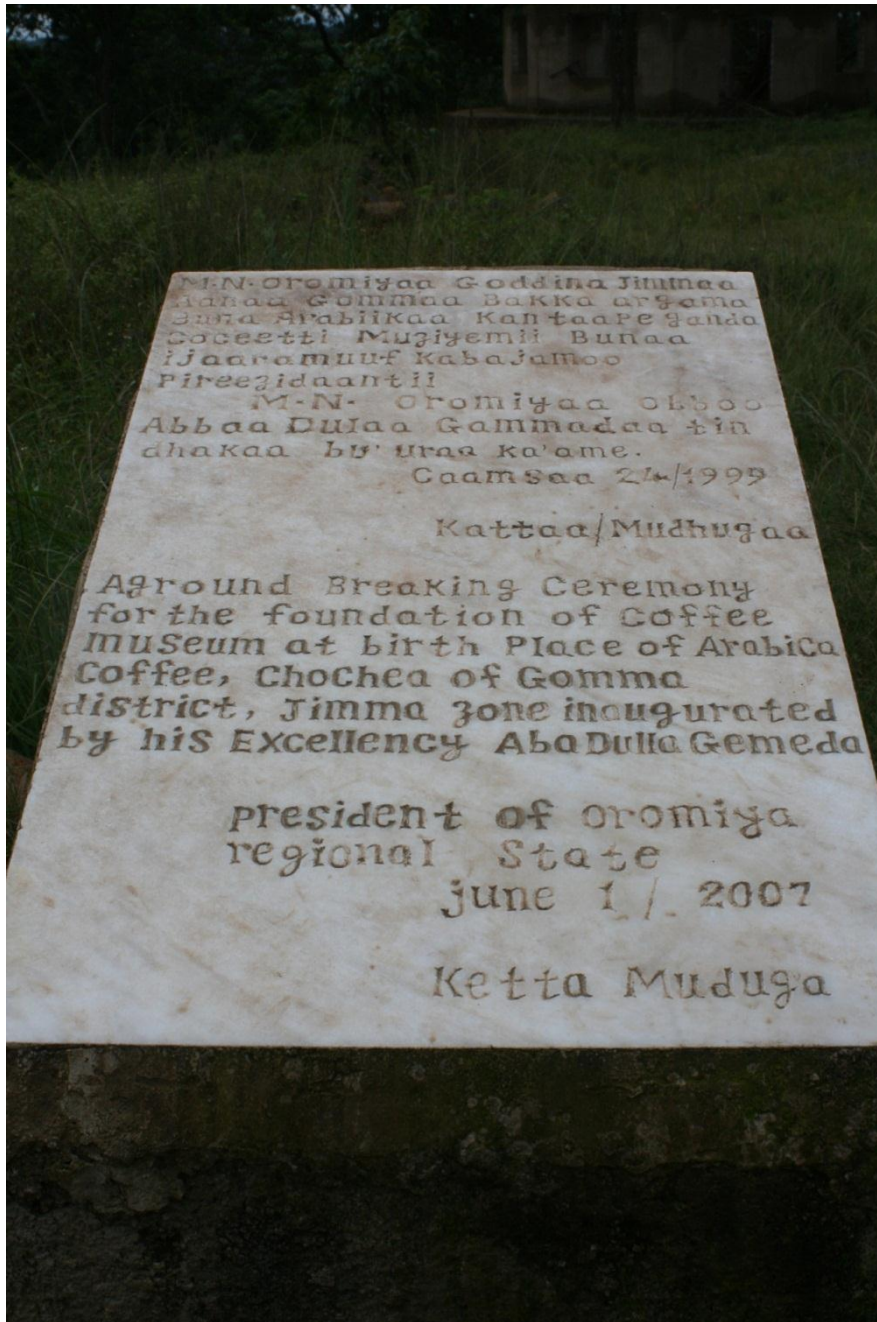


図5 建設予定の「コーヒー博物館」の着工式典にオロミア州知事アッバ・ドゥラが出席したことを記念する石碑（2010年8月筆者撮影）



図6 建設中の「コーヒー博物館」(2010年8月筆者撮影)

以上のように、エチオピア南西部では、「コーヒー発祥地」をめぐる「ゲーム」がまだ続けられている。

## 6. さいごに：コーヒーが表徴することがら

### 6-1. 宗教的・政治的立場

王国時代においてコーヒーは、威信と富をもたらす財であった。ギベ5王国のなかで広大なコーヒーの森を王国内に保有していたリンム（エンナリア）において、コーヒーの森は王の私領であり、そこから王の奴隷たちによって摘みとられてくるコーヒーは王の財産であった。王は、それを商人がもたらす外来の商品と引き換えて、威信の表徴とした。だが王国時代はまだコーヒーを「商品」とする観念はなかった。エチオピア南西部のオロモは、宗教儀礼などにおいてコーヒーをバターで煎る「ブナ・カラ」を多用した。だが次第にイスラームが民衆の間に浸透するようになると、コーヒーを飲む文化が広まり、「ブナ・カラ」は宗教儀礼から姿を消し、結婚や出産など生殖関連の家内儀礼に閉じ込められた。

19世紀まではエチオピア北部のムスリム社会に需要の大きな市場があったが、それはやがて20世紀になるとヨーロッパ諸国にうつった。同じ頃、エチオピア国内のキリスト教徒の間にもコーヒーを飲む習慣が定着し、国内市場も広がった。

19世紀末以降、ギベ5王国がメネリク2世によって軍事征服され、ジンマ王国をのぞきギベ5王国がエチオピア帝国に編入されると、北部からキリスト教徒のアムハラ貴族や軍人が移住してくる。彼らの主な目的は、エチオピア北部に欠けていた肥沃な農地であり、そこに当時商品価値を高めていたコーヒーを栽培することであった。それまで王の私領で

あったコーヒーの森は、「所有主がない」として占有され、コーヒー農園として運用がはじまった。征服戦の混乱のなかで、細々とコーヒーを栽培していた農民たちも、穀物栽培に切り替えた。だが、イタリアによる植民地統治から解放された後、急激に国際市場におけるコーヒーの需要が高まり、コーヒー生産地においては、コーヒー生産・栽培を奨励する行政措置がとられ、コーヒーの生産量が増えた。

現政権のもとでさまざまな宗教が「復興」するなかで、1990年代以降、ムスリム・オロモの間にイスラーム改革思想も広がりを見せ、生活のさまざまな局面において「イスラーム化」が進展した。すると、かろうじて家内儀礼のなかで残存していた「ブナ・カラ」は「オロモ的」で「イスラーム的」ではないとして排除する傾向が強まった。それは、オロモの生活習慣全般に残っていたオロモ的慣習全般の「イスラーム化」、すなわち儀礼そのものの簡素化もしくは放棄の流れのなかで現れた。

このように、コーヒーはそのモノとしての性格上、それが表徴することがらは以下の3つに整理することができる。

①政治的権力：19世紀においてコーヒーは富の源として権力者が占有する財を表徴していた。また19世紀末に帝国の社会体制の上層部に位置付けられたキリスト教徒アムハラが富を蓄積する源泉ともなった。

②霊的存在とのつながり：コーヒーは、その形状ゆえにバターとの組み合わせにより豊穡性を象徴するようになり、なおかつ豊穡性や健康に影響を与える霊的存在との交信手段ととらえられた。だが、「ブナ・カラ」は「オロモ的」＝「非イスラーム的」習慣であるとしてイスラーム改革主義の担い手、とりわけ男性の宗教指導者の影響の拡大により排除されている。

③宗教的立場：祈祷集会はイスラーム改革主義者の攻撃対象となったが、祈祷集会自体はムスリム・オロモ農民の間で社会生活のなかに深く組み込まれている。そこではコーヒーを飲む行為は、宗教色を薄めており、むしろカートを噛む行為の方が宗教化している。精霊と関連が深いコーヒーの方を重視するよりも、カートを媒介として神からの恩寵（バラカ）を祈祷し、参加者に分配するという儀礼的過程の方が重視されるようになった。すなわちコーヒーからカートへの重点移動は、精霊崇拜から一神教への転向という性格をもつのである。

## 6-2. 文化資源

コーヒーは、植物としての起源・発祥地をもつことから、「コーヒーの発祥地」をめぐる議論をわきおこした。アラビカ種のコーヒーが、エチオピアを起源地とすることは世界的にも知られているが、エチオピア国内のどこを発祥とするか、について近年議論をよんでいる。そのなかで候補地としてあげられてきたのが、エチオピア南西部にある、南部諸民族州のカファ県とオロミア州のジンマ県である。

カファ県は、コーヒーの語源が「カファ」であったという従来の通説を容易に利用して、起源地として主張することができた。一方、ジンマ県は、「カファ」という地名がエチオピア帝国期においては、今日のジンマ県をもふくめていた事実を主張する。

またカファ県は、広大な未開発林が残存しているため、「野生」のコーヒーの遺伝的情報を収集することが可能になっている。そして諸外国の援助により、遺伝的情報の分析をす

すめ、自説の根拠がためを進めている。そして「コーヒー博物館」の建設によってコーヒーの発祥地がカファ県であることの既成事実化をはかっている。一方、ジンマ県では、カファ県のような未開発林がほとんど存在していないために、遺伝的＝科学的根拠に依拠することができずに、口頭伝承に依存している。だが、カファという地名と遺伝的＝科学的事実に対して、現地民の口頭伝承というのは、「客観的」証拠という観点からすると弱いといわざるをえない。たとえ現地民の側には、西洋人の世界で広く受け入れられている「カルディの伝説」に類似した伝説を提示したとしても、連邦政府レベルで公認を受けたカファ県に対してオロミア州の公認しか受けていないジンマ県はおよぶべくもない。「コーヒー発祥地」をめぐる「政治的ゲーム」は、今のところカファ県に有利な展開となっている。どちらに軍配があがるにしても、この「ゲーム」は文化資源というコーヒーの新たなエキューミーンを開拓した点で重要なのである。

### 参考文献

Appadurai, Arjun

1986 *The Social Life of Things, Commodities in Cultural Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press.

Bartels, Lambert

1983 *Oromo Religion*, Berlin: Dietrich Reimer Verlag.

Beke, Charles

1843 "On the Countries South of Abyssinia," *Journal of the Royal Geographical Society of London*, vol.13: 254-269.

Bossolasco, Laurent

2009 "A study case on Coffee (*Coffea arabica* L.), Limu Coffee," ([http://horizon.documentation.ird.fr/exl-doc/pleins\\_textes/divers11-06/010050911.pdf](http://horizon.documentation.ird.fr/exl-doc/pleins_textes/divers11-06/010050911.pdf), 2013年2月13日取得)

Cecchi, Antonio

1886 *Da Zeila alle Frontiere del Caffa*, Vol.II, Roma: Ermanno Loescher.

Coste, René

1992 *Coffee: The Plant and the Product*, London: Macmillan.

福井勝義

1981 「コーヒーの文化的特性——エチオピア西南部の事例から——」『茶の文化 その総合的研究』第二部、pp. 165-211、淡交社。

Graeber, David

2001 *Toward an Anthropological Theory of Value*, New York: Palgrave.

Guluma Gemed

2002 "The Rise of Coffee and the Demise of Colonial Autonomy: The Oromo Kingdom of Jimma and Political Centralization in Ethiopia", *Northeast African Studies* Vol. 9, No. 3 (New Series): 51-74.

Hattox, Ralph

- 1985 *Coffee and Coffeeshouses, the Origin of a Social Beverage in the Medieval Near East*, Seattle: University of Washington Press.
- Hussein Ahmed
- 2010 “Tradition and Innovation in the Ritual of Khat Consumption in Wallo, Northern Ethiopia,” in Ezekiel Gebissa (ed), *Khat in Ethiopia*, pp.13-27, Trenton: The Red Sea Press.
- Ishihara, Minako
- 2003 “The Cultural Logic of Civiculture in Ethiopia,” *Nilo-Ethiopian Studies* 8-9:35-60.
- 2006 “The Religious Roles of the Naggaadie in the Historical Gibe Oromo Kingdoms’ in Siegbert Uhlig (ed), *Proceedings of the XVth International Conference of Ethiopian Studies*, Hamburg, 2003, pp.119-127, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- 石原 美奈子
- 2005 「コーヒーの森とシャネル5番—ジャコウネコ飼育をめぐる動物愛護の主張とその影響—」、福井勝義（編）『社会化される生態資源—エチオピア 絶え間なき再生』、pp. 179-216、京都大学学術出版会。
- 2009 『エチオピアのムスリム聖者崇拝—ティジャーニー導師アルファキー・アフマド・ウマルと西部オロモ社会』東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文
- Kassahun Seyoum, Hailu Tafesse and Steven Franzel
- 1992 “Prospects for Improving Coffee-based Farming Systems” in Steven Franzel and Helen van Houten (eds.), *Research with Farmers, Lessons from Ethiopia*, pp.173-190, Addis Ababa: Institute of Agricultural Research
- 松村 圭一郎
- 2008 『所有と分配の人類学—エチオピア農村社会の土地と富をめぐる力学—』、世界思想社。
- McCann, James C.
- 1995 *People of the Plow*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- Mohammed Hassen
- 1990 *The Oromo of Ethiopia: a History, 1570-1860*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Naironus Banerius, Faustus (translated by C.B.)
- 1710 (1671) *A Discourse on Coffee, its Description and Vertues (De Saluberrima potione Cahue seu Café nuncupata Discurscus)*, London: Geo.James.
- Pankhurst, Richard
- 1968 *Economic History of Ethiopia, 1800-1935*, Addis Ababa: Haile Sellassie I University Press.
- Pankhurst, Rita
- 1997 “The Coffee Ceremony and the History of Coffee Consumption in Ethiopia,” in Katsuyoshi Fukui *et al.* (eds.), *Ethiopia in Broader Perspective* Vol.II,

pp.516-539, Kyoto: Shokado.

Pendergrast, Mark

2010 *Uncommon Grounds: The History of Coffee and How it Transformed our World*,  
New York: Basic Books.

Petit, Nicolas

2007 “Ethiopia’s Coffee Sector: A Bitter or Better Future?” *Journal of Agrarian  
Change*, Vol. 7 No. 2: 225-263.

Petty, Celia, John Seaman and Nisar Majid with Floor Grootenhuis

2004 “Coffee and Household Poverty: A study of coffee and household economy in  
two districts of Ethiopia,” ([http://www.evidencefordevelopment.com/newefd/  
files/Reports/OtherReports/Ethiopia\\_HHEconomy&Coffee\\_Final\\_Mar04.pdf](http://www.evidencefordevelopment.com/newefd/files/Reports/OtherReports/Ethiopia_HHEconomy&Coffee_Final_Mar04.pdf),  
2013年2月5日入手)

Schmitt, Christine B.

2006 *Montane Rainforest with Wild Coffea Arabica in the Bonga Region (SW  
Ethiopia): Plant Diversity, Wild Coffee Management and Implications for  
Conservation*, Bonn: ZEF Bonn.

Tezera Chernet

2008 “Land Resources and socio-economic report of Bonga, Boginda, Mankira and  
the surrounding areas in Kaffa zone, SNNPRS, Ethiopia,” PPP Project report,  
Addis Ababa ([http://www.kafa-biosphere.com/assets/content-documents/  
KafaLand-use-Survey-Final-Report.pdf](http://www.kafa-biosphere.com/assets/content-documents/KafaLand-use-Survey-Final-Report.pdf))

Tilley, Christopher *et al.* (eds.)

2006 *Handbook of Material Culture*, Los Angeles: Sage.

臼井 隆一郎

1992 『コーヒーが廻り世界史が廻る：近代市民社会の黒い血液』、中公新書。

Weinberg, Bennett Alan & Bonnie K. Bealer

2001 *The World of Caffeine: The Science and Culture of the World’s Most Popular  
Drug*, New York: Routledge.

Weiss, Brad

2003 *Sacred Trees, Bitter Harvest, Globalizing Coffee in Northwest Tanzania*,  
Portsmouth: Heinemann.

Wolde Michael Kelecha

1987 *A Glossary of Ethiopian Plant Names*, Addis Ababa: s.n.(出版社無記載).